奈良県×陝西省 交流の軌跡

奈良県・中国陝西省友好提携10周年記念イベント

日時：2021年11月20日（土）　会場：奈良県コンベンションセンター 天平ホール

平城京が置かれた奈良と、隋・唐の都・長安のあった陝西省。平城遷都1300年を記念して、2011年に友好提携を締結。その10周年を祝う記念イベントが開催された。

基調講演は河上麻由子・大阪大学大学院准教授。天平時代の日中交流の特徴、とりわけ中央アジア（ソグド文化）との関わりや「唐を訪れた日本人たち」に着目した精緻で新鮮な内容に、参集者は熱心に耳を傾けていた。

ついで、関口和哉・読売新聞橿原支局長をファシリテータにパネルディスカッションが行われ、米川裕治・奈良県立橿原考古学研究所指導研究員が陝西省での考古学研修の意義や思い出を語り、オンラインで登壇した冉万里・陝西省西北大学文化遺産学院教授は、遣唐使「井真成」の墓誌の記述から墓葬の形制（形状や構造）を考察し、日中両国や奈良県・陝西省の友好に関わる今日的な意味を提起した。

最後に、張連生・張鶴の父子による「二胡」の演奏があった。日中両国の歌が、軽快に流麗に、あるときは荘厳に会場に響きわたった。最後の曲では、草原を疾駆する馬のいななきを二胡が奏でた。

たしかに、中央アジアからの風は、大陸・半島を経て、奈良に届いていたようだ。

平城京から長安へ―天平時代の日中交流

大阪大学大学院准教授　河上麻由子

天平期（730～750年ごろ）は、日中交流の全歴史を通して重要な意味を持っています。

まず、日本と「唐」の間を「往き来する人」が、他の時代に比べて際立って多いことです。

天平期には安倍仲麻呂のように唐王朝に仕える人物も現れました。そして宮廷での席次を新羅と争うなど、「国際社会」での立ち位置も強く意識されるようになったのもこの時代です。

また、「遣唐使」という言葉から、大使・副使らの上席者に目を奪われがちですが、乗組員や留学生、専門技術者なども、各々の立場で「知」を習得し、日本に持ち帰りました。

天平期は、日本に来た人も―漢人に限らず―多数にのぼります。鑑真和上は戒律を伝えたことで有名ですが、注目したいのは持参予定品に唐王朝公認の帽子（樸頭）が含まれていたことです。鑑真一行が仏教関連に限らず、唐のモード（流行）も伝えようとしていたことが窺えます。

当時の唐は則天武后と玄宗皇帝のもとで最盛期を迎えていました。特に玄宗の時代は「西域」への関心が最高潮に達し、首都・長安では「胡」の文化が大流行していました。「胡」とは、広義では中央アジア一帯のヒト・モノ・コトを意味し、狭義には「ソグド人の国」を指しました。かの楊貴妃もソグド人女性のように「胡旋舞」で玄宗の気を惹いたと言われています。

天平期は、日本（人）が唐と往来する人たちを通して、「世界」を知った時代と言えます。とくに文化面では、「胡風・胡俗」などの異国（西域）趣味が、唐文化として摂取されていたことが注目されます。

まさにこの時期は、日本と唐の「密月」でしたが、同時に翳りを見せ始める時代でもありました。天平期の遣唐使派遣の回数は3回ですが、計画されながら停止された回数もまた3回。最後2回の停止は「安史の乱」（755年）の余波でした。ソグド人を父に持つ安禄山と史思明の反乱は、西域趣味を急激に萎ませ、以後非漢人への反感から唐の社会は排外主義に傾いていきます。

日唐交流は天平期にピークを迎え、日本は最盛期の唐文化を直接受け容れました。唐も友好的な隣国として親しみを込めて交流しました。この時期の友好の記憶は、唐との交流が衰退しても受け継がれ、のちに国風文化を生み出すことにつながっていきます。

井真成墓誌について

西北大学文化遺産学院教授　冉万里

井真成墓誌は、２００４年、中国陝西省西安市の東郊外、隋唐長安城の東城壁から5キロメートル東に離れた滻河の川岸で発見されました。現在は西北大学の歴史博物館に「一級文物（日本の国宝に相当）」として収蔵されています。

墓誌は墓誌蓋と墓誌銘からなり、上部の誌蓋は一辺37センチメートルで「贈尚衣奉御井公墓誌文并序」と刻まれ、下の誌銘は一辺39・5センチメートル、厚みは7センチメートルで、171の漢字が刻まれています。【図1】

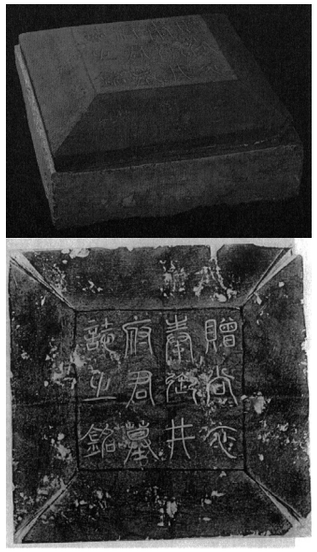
この墓誌のポイントは次のとおりです。まず、誌蓋に「尚衣奉御」という官職が書かれていること。誌銘に「国号日本」、井真成の没した時期として「開元廿二年正月」、亡くなった年は36歳、そして彼の死を皇帝がたいへん残念に思い（「皇上傷」）、唐の役人に埋葬を命じた（「葬令官」）と記されていることです。開元22年は西暦734年、ちょうど玄宗皇帝の治世にあたります。

さて、墓誌についての研究は深まっていますが、墓そのものは残っていないので、井真成の墓葬の形制（形状や構造）はわかっていません。しかし、井真成に贈られた「五品」のランクにあたる「尚衣奉御」の官職や、その他陰刻されたいくつかの言葉から、論理的に「推測」できると思っています。

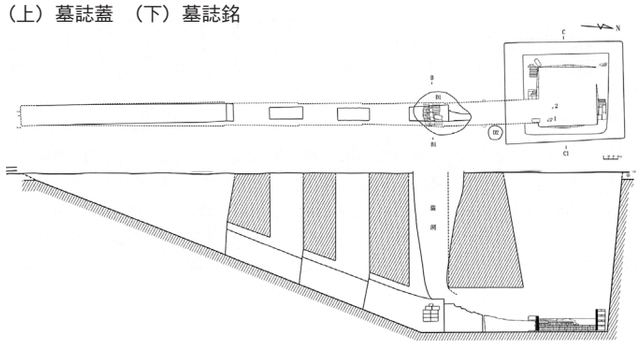
井真成の墓誌は、唐の時代の日本人のものとしては初めての発見例ですが、来華したソグド人の墓は数多く発掘され、近年玄宗皇帝の時代の「五品」のソグド人官吏の墓が出土しています。墓室は5・1×4・34メートルの方形で、墓全体の延長は26・7メートル、上部は三層の天井で覆われていました。【図2】

私は井真成の墓も、この墓と同様に偉大で壮麗なものだったと思います。中国人以外の官吏の場合、官職のランクが同じなら、政府が行う埋葬の方法や墓の形状が違っているはずがないと考えるからです。

留学生・井真成の死を悲しんだ玄宗皇帝は、死後に「五品」を贈り、公的に埋葬し、その墓に「国号日本」と刻ませました。井真成の墓誌は、いつまでも消えることのない日中両国の友好の証しです。奈良の陝西省の交流も、その歴史の上に成り立っているのだと思います。



【図1】
井真成墓誌
（上）墓誌蓋　（下）墓誌銘



玄宗皇帝時代の五品のソグド人の墓　【図2】

左図の3D図解

奈良県と陝西省の古代から現代に亘る交流

奈良県立橿原考古学研究所指導研究員　米川裕治

平成26年（2014）から、陝西省との友好提携による専門分野交流が行われています。これまで6回（6人）、橿原考古学研究所の研究員が西北大学（西安市）に長期的に派遣されて、技術交流・人的交流を深めてきました。現地での活動内容は専門的な知識と中国語の習得で、私の場合は「古代日本と中国における都城および寺院の比較研究」がテーマでした。平成29年（2017）に派遣され、活動拠点は西北大学太白キャンパス―地下には鑑真が受戒した実際寺の遺構がある―と陝西省考古研究院を使わせていただきました。

現地での3か月にわたる研修・調査体験のうち印象的なものを一、二、ご紹介します。

まず、西安市高楼村の唐代の墓地を中心とする調査では、芸術学部の学生が遺構に描かれた絵の俯瞰図をスケッチしていました。日本の発掘現場では見られない光景なので新鮮に感じました。

もう一つは、12月の陝西省北部地域への調査旅行です。凍てついた黄河の向こうに黄色い大地が果てしなく続いているのですが、そのような寒冷地に半年以上駐在し、遺跡の調査と保護にあたられている担当者の姿に心を打たれました。

受け身の研修ばかりでなく、龍門石窟研究院では、奈良県の古代寺院についての調査研究成果を紹介する機会も与えてもらい、とても得がたい経験をさせていただきました。

3か月にわたる陝西省での考古学研修を通して、たくさんの専門知識の習得や学術的触発を得ましたが、何よりも、たくさんの友人をつくることができました。とくに高熱で倒れたときの当地の人々の親切さは忘れられません。人と人のつながりの重要性を痛感しました。

唐招提寺旧境内 三彩瓦
（奈良県文化財調査報告書 第177集巻頭）
講堂と西室（僧坊）の中間地から出土。鑑真一行の中に唐の技術者がいたのか。遣唐使の専門技術者（「玉生」）が持ち帰った技術なのか。

三ツ塚古墳群漆塗り革袋と復元図
（「大唐皇帝陵」特別展図録第73冊p28）

乾陵 南神道石刻蕃酋像（部分）・蕃酋像の佩用品と漆塗り革袋復元図（「大唐皇帝陵」特別展図録第73冊p28，29）

墓から出土した革袋。被葬者が生前に所持していたものか？　唐に服属した異民族の像に類似のものが見られる。（右）
上資料全て：奈良県立橿原考古学研究所提供